藤田浩子の　少し昔のこと〈64〉

姓

今回は私事で恐縮ですが、いま新聞やテレビでも取り上げられている夫婦別姓のことを書いてみようと思います。私は結婚するとき（６０年も前の話です）、旧姓から藤田に変わるのがいやでした。旧姓は大矢です。２３年間その名前でしたから、大矢姓に愛着もあったのですが、愛着より、どうして女が相手の姓に変えなければならないのか、そこがどうしても不満でした。一人娘で婿養子をとる人もいましたが、それは特別のことであって、私のように兄が３人もいれば、女の私が大矢の姓を継ぐ必要はまったくないし、相手は女きょうだいの中の一人息子でしたから、自分が相手の姓になるなんて考えてもいなかったでしょう。

私は「ジャンケンで姓を決めよう、もし私が負けたら藤田になるけど、私が勝ったらあなたが大矢になってね」と提案した

ら「いいよ」と言ってジャンケンに応じてくれたのです。そして私が負けて、私は藤田浩子になりました。彼は、わがままな恋人のお遊びに付き合ってやるかという程度の軽さだったと思います。なにしろそんなジャンケンをしたことすらすぐ忘れてしまって、覚えていなかったのですから。

たとえ私が勝ったとしても、彼は従わなかったでしょう。きっと「そんなばかなこと、できるわけがないだろう」とか「おれの家族が納得する筈がないよ」などと言って押し切ったと思います。そして私も、もし私が勝っても彼は従わないだろうなと、心のどこかで思っていました。私は、ジャンケンに負けたことで、自分を納得させたのです。私がこんなに真剣に思っていることを、男はちっともわかっていない、前途多難だなと思いながら結婚しました。男は今もたいして変わっていないように思いますが、女は変わりました。

リレー連載　＜197＞

わたしの大好きな絵本

大澗　弘幸（　劇団風の子　）

『ゴムあたまポンたろう』
作：　長　新太
童心社

娘が生まれていなければ、きっと、絵本と出合っていなかったと思います。本と言う文化は私の中では漫画と小説などの活字。漫画で言えば漫画喫茶ができるほどあります。そんな私の本の文化に、突然やってきたのが「絵本」でした。本当にびっくりしました。娘そっちのけで絵本にハマりました。長新太さんの世界観「ゴムあたまポンたろう」なんで頭がゴム？なんて疑問も感じさせないまま話が進んでいく心地よさ。スズキコージさんとかたやまけんさんの「やまのかいしゃ」この会社に就職したいと思いました（大学時代に入りたかったのは東スポ、東スポのウソまがいの記事に憧れていました）。

山下洋輔さん、元永定正さん、中辻悦子さんの「もけら　もけら」には新しい角度の音符なのではないかと思いました。同様に谷川俊太郎さん、元永定正さんの「もこ　もこ　もこ」も詩的世界観が絵になったとびっくりしました。

これらの絵本に影響され私の創作が始まりました。